



大徳九輯下帙中條齋評上四

百二十六回  
百三十五回

僧  
600  
72





門 曾 4  
號 100  
卷 72

八犬傳九輯下帙之中愚評 上







事を多しき泥固を餘を大に記事法詠平和  
之場を自餘を孫あき入紙中を存に紙を  
且伴をせしむ加味となするに中を再  
致悪覺を結核芽子に大場を勿論平和となす  
此を味味中より九件多し物中姓氏一條採味中  
計を之を知ると大に違ひ且伴書掛六紙を  
平和の中用ひし事九種を之を餘餘入紙場  
より後却るに微深き紙を之を好むとて採  
之を書丸とて之を信る書紙に元來に遷り事

狂更持るゆへ書紙碎と發せしむあはれ又只感心  
敬服とて之を之を何れ今一陳風心とて之を中  
根より先假に旧癩に理府穿鑿を中より自解  
感服に之を中より之を依於夜知るとして平  
義の信を之より大に之を特に之を之を是とて又  
之を之を本を上に之を拍子と失教と戲を之を書文と  
之を之を善心存に之を丁ねと及下は之を之を之を  
之を之を之を之を之を之を之を之を之を之を  
之を之を之を之を之を之を之を之を之を之を



めどらびに此のひとあゝなつし中々まゝのこゝろに  
いふはたしつとくも中々なるとあゝまゝに思ふに  
古事新事なるといふは

二天竺の自來水と文藝とをより法を傳へしよとたり  
は論議の確乎として不動の法たるを有るは文藝  
と法を既に是をさしつとくもその法を傳へしよとたり  
和詩と漢詩とをさしつとくも此の雅俗自他自來の法は  
歌をよめるは其の一家の法は毎に法服の法は  
乃の高なるに法をさしつとくも其の法を傳へしよとたり

試し中とては論中々有るに本朝の法は繁華に於て又  
六樹園の道に縣に於て堂の都の法は其の法は試みたる  
扱て事々々あつたに於ては法を感得せしめて有るに  
且論をさしつとくも其の法を傳へしよとたり  
演義小説の法は其の法は其の法は其の法は其の法は  
是れ賞取の法は其の法は其の法は其の法は其の法は  
失教は仁免は其の法は其の法は其の法は其の法は

癸十丁月也。

徳高

甘者作堂先生西案下



八犬傳九輯下帳之中

百二十六回

去向の烟東林の旗前回数二十四回の末は川劔田の  
三士六車の方へ赴き山坂村三士六菴は烟を觸しうと  
あゝそれとてそこは経後們の眼も又せて昏あされ  
たるそれとてえよりさうへきさうまでさうたててい  
あゝそれと編とさうへさうその昏あしよえよ今よ  
くは日月の天のまなと文面の佳趣のまあつに  
例の其時候しをさやあてさうとさうよあつと  
その旗色さへ何とさういさうさうさうさうさうさう



ろー堅削ハ疑ひ訝うり経稜素頼ハ志うまうよ奇  
兵の術そと冷笑ふそぬくさうとかくとあ〜んー  
犬坂う計策ハ多勢とつえとて疑えもと境むと撃ん  
とあ〜渠們もそとハ謀れ祿とも於万一とこと  
隊兵を分ちうら犬坂う敵を分んとの本謀ハ  
たうささ〜してあまうさへ此分隊より兵息よぶく  
ありて破も早きなと曲折も入てぬ〜他筆あん  
よ只べ多くと犬坂う計策ハ合せ肩きて此曲折ハ  
ゆも肩うー老煉筆ハ感心ちうらや○堅削たぬハ  
て剛ちうり又さ臆し未て素頼と誑き東へ道

る〜と乗巧の〜とめ〜此壯客們う我意ハなきハ  
前回ハ既よん〜てあり法師武者さへさ〜いとをうーく  
又さ〜とと小まほ味よき〜と〜とや〜らうし○  
星額ハ九個徒刃和解を扱えんとてま〜すぬ  
前回のむ〜とい〜とゆ〜み〜と〜は理不盡  
よ捕捕よめて何の〜と〜さ〜ハ女〜ほいよく意外  
〜身を動〜とぬと悪僧們う米苞の如く肩よ〜と  
載さ〜ハ後のむ〜の肝要なれ〜と声ふ〜と  
こび叫ひかま〜と身を起さぬ〜と〜と〜似つぬ  
醜態あ〜ん〜狩おき意外ハ後段工つ〜○山坂



二士を素彩なり先回をまうして二士より素彩を伺ふる  
おやううー普通あるんよハ必素彩より伺ふは昏へまを  
くりて二士より答め伺ふる先まきとの勇みよんて  
主客の勢ひいふ人かまらぬまで二士兩個の夥兵よて既に  
多勢と一呑ま待くるへく勇威凜としてり素彩ら  
暴言二士ら理言りふとをなくかろく二士ら事とを  
のまらるべきのいひするはことよおやううー又只棒  
もてらるのまぢら趣深くおやううー三士並ひておやう  
ともこの勝敗子ぬあしを大村ハ村薩よりふさ  
よめて射さやいあささ射倒すと即ち一時の正兵奇兵

アうやうやういことを判ひてあやううある稽筆例さう  
感心し又死活ハあうと平比けりよて話をかゝぬさ  
も煉筆おやうな○堅削々怯と塗土かくとさぬと妙  
文句又綾後ら素類の勇をおのめと惴利とまう  
へそいふぢらとうさぬと前條既よ平比くる剛の者と  
伯仲の武藝勇悍とこそといとむのやうて讀む  
うらうもさうらう噴飯せうらうし茂林へ無謀よと  
へらさうて堅削を指揮の智慮けり顔と文物とん○  
堅削うえやく結担ぬてあう千ヨト三息かよと  
あろまらぬのまうとあうとあの素多頼くるの経後縛ぬ



さぬいろくもて又犬士のおもむくありあつらん  
ふく例のぬ華犬飼う突法手練に中より約束  
るむやうぢう犬村はかくゆつ今せ猛勇役はとく  
ぢまを此田前條の一棒はいとえ有てめたしく

○川田飼う経後們を責るの理言前の山坂言  
と意同しくして語は重なりさるぬハ例の華  
ぢるくふ堅削們ハ聲声ふえとてふくは経後ハ  
痛楚もてぢりふこそなまをもしおもあま此聲ハ  
前條の星額ハ慌て叫びしと對して報應ハ早うりり

○犬飼う経後們首を削んとつふを大川言禁む

前輯まで大川いへ言はまぢれも又つへ其まハ實難  
えいへいふまあるにわるとあかハ肯ひくふれハの意と  
ありてのまぢれとこまぢれとあつて頭を掻きくりひ  
らんさるんぢれハこそ小文現大ハ笑局ハ入てとろしよ  
戲言すつとをこまぢれハ大江する前輯ハ大山言ぢれと  
禁よハ大川ハかくつぢるハ肯ひくふハかつけまふ本  
意ハ共ハ同しるよりて此條ハ大山ハ前言をむきよの  
言ハ及ん彼おほしとておぼくまの唇さむいらく面し  
又此三士ハ山坂もとやくと危右川を危ふぢるさある  
へきハせちらんもてえしてなる後條の危急の合級犬士



們の思ふ方より大くハあるをまき例のつくやう  
涅槃偈の幡を燻爇るに中遺なくくぬくしく二匹の  
馬のあをひなきとし二匹に乗せてもあなきをいさ  
三貌荒神とハ曳手子節の反対牧醜態愉快よおも  
をろし一匹ハ脚痺て用エたるを初定明白大村ハ馬を  
薙倒し犬飼ハ歩けざるを投ぐる捕へぬもろくまで  
おろろきその又その馬二匹の用い初め初定すも成ると  
さうとハぬく二寡婦に乗るとハ二匹夫と乗せぬく其  
馬之又仁田山ハ馬ハ幡宮奉納の馬とて馬二匹とし  
とくひ合あくるなきいふも精筆とくみるまふ

○山坂村ハ素我們を繋いでまうつ居る川田飼ハ経後  
堅削們を牽ききてまきつる双方の符合も勇と愉快  
んた太川の危ふくと大坂ハ衆又るおく飛道具の事  
むとといえさぬくらく合紋丁字之折也二思亮三凶  
士長老法師告りし星額ハ諺もとも大歌勁敵と  
いつりくさぬく二百余の僧俗を辛ひて幾多ひもハ  
ともあそんまきの一我ともくハまき其あそんまき一我ハ法蓮の  
幕切大士入房のちのちれそ大歌あつてハええあつた  
ちるよま素頼ハ経後ハおひの外して何のともく  
ちるまら生捕らぬてあまふてハふといええなきやん



よくおの六例の配割おもしろく見せしめたるは  
然二隊のよきくして、棒のこももあしとてしとてあ  
自れは殺傷の有まきとてしとてしとてしとてしと  
犬士よのり合よてむひむつてハ六犬の男よとてむひむ  
あれハ女のともなく生捕らさそハ有まきとてしとてし  
志れとも素頼経後ともかくともいふとてしとてしと  
醉中といひふく郷士よ討らむほとむれハその本るも  
あれてハあれと是も大江といふまきとてしとてしと  
こぼつこ或ハ組む同もあぬの宗法いふもふまきと  
きくもてまきとてしとてしとてしとてしとてしと

とてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしと  
敵勁敵ハ左右川の二隊こそハ其勢ハ此厄ハ大江の  
主といへハこれハ前輯徳用ハ軍議ハ隊的當りて大江  
末らさハ、大まぬれく道骨宝刀も乱暴せむるく  
実ハ大敵おそくハこそく入り救ふるハ大江ハ大諸  
兄よの集會見参のみやけの花前よりとてしとてし  
しる深顔向妙脚色花やうと愉快ハ此一隊ハ犬士入房  
の花といふ中も煎つてハ集會の大江ハ花ハ一隊ハ  
富山お祝の花よりとてしとてしとてしとてしと  
何や名もかく花役おほくハあつとてしとてしと



既よ出てハ此神童とやとまをせりる童思のたまひし  
○経後東林の歌の古虚之頭を搦んと堅削と入りしめ  
又おのじよるひの入りよとて不知事内のなるこ三犬ハ伏し  
て歌をえりるハうつて事内をたやしし但一熟せぬ地  
やうとてるよのそとて其処よりいへるの便宜よとてま  
すこハかくも有べきぢぬハ大士のうこ事内の知不知を  
いへるまをせりしと経後堅削かきすてハ不事内をまてハ  
いへるあんな渠ハ遊獵と事とさるぬハ此辺の山林熟し  
居るとハ有るういふぬハ堅削は令し入るとさるぬハ詔は今  
ぬし何とるかとう此深林のゆくてさるぬあつての持獲の

之葉ふとあつまほしくはのあしこもろんるぬハぼんの  
その文句の上の枝葉ともやぶるぬまてまらつてぬハ事  
とてかくてはあぬハまらぬとも入ての積りぬハ又精あ  
まくとあつるまてをさすよまらせといひつるまてあつ  
例の小理屈りつぬ旧癖流一笑し

百二十七回

尤右川の名いと趣ありて當時の称をのたまししをちろん  
るぬ今おままらけらるまらぬハ古圖をたまたりて  
唇をくちまらぬハ古今の同一なるるぬハ言  
のぬし○惺利ハ隊二言とひぬよしとてさるぬハ



十のときうめうし御説とてうらからよみい世交代の  
も問答半句の暇とてうら問致におよむおもろしとて  
主たるの、大ぢぬの長くと短くと揚利と罵る言のきき  
ぢぬとてい、大或の思文答ある言とありていありに既に  
るぬの問答の素類と山坂とのさうよとせしとありはを  
隊とよ又とてく重のて答うまうありに前後の隊は  
そのあきもあしぢぬのさうとありとてを清説の二言  
よかるとあ双方言のをよせぬし其ぬあるのみあり  
はえけしとてうよ一のうとてうぬ 仇あるとてい世  
交代のうのそぬのあもるぢぬとぬらうと相挑むと有

へきとてうとてい何事ぞい言ふぬ遠くやうぢぬと御説とて  
うちめをぬゆらうでい虚言はとかく見えありてい言葉に  
理不盡の十年の電光とてい何事ぞとてくして却てとてい  
言とぬ遠とてい一句とてい其場とていぬぬありとて  
筆ハニし ○、大降魔の終文を誦掛く緝捕を所く  
昔の餘は世に世のゆ要をわくとて有まぢぬ世とていみ  
訥平ら追兵を二今とて伏ぬし猛勇よ合せてい此下あり  
かいたるまやうぢぬとてい血氣采必死の憤致とてい生  
死を度外よかま只遺骨を護るのたさうとてい倫敵を傷  
めぬあしとていゆとてい勢きたまうてい観念とてい組を拒



まきこわりの唇さるあぢまひ有るふ信乃は慌てま  
課をきいてまき勝負を搦るの武闘をえ信乃は下  
りて、大は副本し役せうがふ甲斐つて貫目ハま  
ちりまきま徳用がそれか我は、大うきをといつて  
枚ふのいともをく搦まき武闘のいこつてまき隊ハま  
大敵ちうふ稲塚の小杉木ハ彼騎馬の惴利を撃つ  
まハく小究竟ありて鐵禪杖と受け挑むるも又究  
竟恰好そこま旧稲塚ハぬをくぬまはたれま  
ぬおこあはれまて我ハ大士ハ刀を抜くるま照文  
代いふは是非をく搦るま殺傷して禦まはしあはれ

用心深き脚色なるふ信乃は惴利を思ひ搦りハ即  
大角うま頼こころ思ひはまれとすまきくハ不  
意よめて撃つやうまぬまは虚ニまぬしてぬま  
○徳用うまき置るままの重りあはれ暴勇アま  
の用くこまを又必かく者へし信乃ハそれと答ふるま  
てまき破戒を斬ると一向ま返して勇まふの武者廣言  
まをらんまはけりま我三隊四隊とまをるまのまぬ  
向配のぬハ誰う真似得んかの三虎ハ一手まをれとま  
六十五介の鐵鹿杖や、腕ハ乱まてま猶龍虎の勢あり  
且助悪の僧道二百人まき小杉木ままこと安意まま



の語いあれとそぬけハむやくとせ照文代四郎か  
の如く、大も嗚呼憐む一但一者官極意息ハ禍患  
福善あやまちなきつまり承知で居ふくも是眼の  
前の此危窮さあつる巻を掩もれて嘆嘆やるる  
をうりうりところへ親屬やんやく婦幼ハ狂さるん  
あふ一お揖よりの仕ゆれハ親屬も未合ハ必  
るぬの花あふくかのとせとるゆハあれとせむい  
よりとやハの花ふ富山出現と又るよ二度入せ  
らぬる自在筆相似て一つも相觸せと鐵扇を馬の  
尻を撻つ親屬仁字ハ持前なると今三人の雙敵

たる端利を猶傷け一とて山笠ことさる馬のこ撻へんや  
事ハ大角は同一れと波刃と此刃とハ又勢同くく  
走つくやいふ名告あふとさそくは撻つなり馬走の端利  
川は溜失ととハ妙天妙趣向ともらん此條の妙脚色  
深いふあやういふ影兵を撻つ鐵扇ハえよりとと  
あはれくハ鐵扇ハ孝嗣と比試より足取りの手馴じ  
物館山までハ不用ありしうとよハ恰好似合の用物○  
孝嗣并は次國太郎三銃砲を撃ち流し溜て往方  
知れとよありうせとるさそく奇ぬるふ統ふ前輯  
は此三人ハ親屬とともとも結城法也とて



才より只そのるんのもあるて深くいふつらうし  
くふらうしてよく思へ次国大、郷三六かく孝嗣  
らよまききして大士とらよ入房までハ先つハ大  
士のそひよのよで孝嗣うてえまうくは又大士  
と一同は諸茶もまもあうくはハとて代官邸の片  
茶もそいふくかれれをうて孝嗣ハ又孝嗣を別段  
の入房あつてハユ合ひるし狂河鯉佐太郎あハ何と  
禱して別とんせれと既よきせよと改めその政本大全  
今まう禱してあえううさる前輯うのたこひあつと此  
此の百はよ意外忽死生死之とよ隠せれく奇

ぬき孝絶感服之改本大郷三六からして大士は徳ひ  
入房も別よるぬハあううを判いそ大田大川は早く再  
今まやいまき流とてとも失せえれくる只相伴よてハ  
有へうと後ハ又孝嗣の出よまうの用あ、故又これ  
らハあうま別よつうひ道のあまの故腹稿とらう知  
へきより一孝一孝嗣のおくハ控まうくもていふと今ま  
隠されくハ奇とぬ、後日のまうひよくいふと今ま  
まらよまき待てれつね孝嗣ハいふまこと二人とも  
撃して滴て流と失ても必別案ハあうしと婦弟ハと  
かく大まの着官ハたうらうてあまもてあま後とてあ



ふみくし其死をいみじく嘆息して命運をふらむ屍體を  
とみやいさおれいといひあてばいさくをいひむやあねる  
るの首官よ死をいみじく嘆息して命運をふらむ屍體を  
いとみじく嘆息して命運をふらむ屍體を  
かろう又文面上のそのための再三もろうておれあ  
よや首官の推量あつるかく再三も死をせておれあ  
てハ文段は趣をくりハ後日のそえあつること  
友誼深ゆのそのための肝要の諸首官と夫婦切  
ひくくいさおれいといひあてばいさくをいひむやあねる  
○三十人の神器將軍前も毛那々議しる如くふふ

ろんそ二隊いさおれいといひあてばいさくをいひむやあねる  
代り郎其餘いさおれいといひあてばいさくをいひむやあねる  
その鍔丸は火家の同士撃撃愉快し奇妙に似ておれあ  
誰と目へさうあつていさおれいといひあてばいさくをいひむやあねる  
二度筆あつて勅凡猛可ハ奇ハ妙ハ又別あつて  
うふ二の玉とさう倒樹は横と急流は流とていさおれいといひあ  
白浪るゆのゆ兵就存り追掛の骨しをく一吹よて  
あつてその擧げはさういさおれいといひあてばいさくをいひむやあねる  
いさおれいといひあてばいさくをいひむやあねる  
いさおれいといひあてばいさくをいひむやあねる



吹きさらすもらんてらんしきと信乃は歌とらん  
としは吹まよとらん即神凡自まよと自まよと  
煉筆他筆とそそ及らんや結城の落林ハそよと  
まよぬ自まよとぬと存すん○大黑暗の中まよ  
く陽枝と捨振り合まりて端れらん神凡は慌と  
ぬいふす大ハ大しきとまよるのやとぬと  
神凡と昏るる黑暗の中は慌と駭とぬ大とむく  
昏るる筆まよと端ぬ大親筆とまよの言辭  
簡うと意ハるぬりし館山平法のる者初們の  
まよ又代回中まよとまよと言みりうとまよと要文

例のむら系く○神僧親筆ハ大們う難と告  
於て余の種とそとつまよと語らるるおやと  
配らるる地花靈験の深論も真ハあるその木佛  
石仏のぬるぬをそぬとまよとそよとぬとぬ  
かの論ハある神物の使つてとるく靈ある如く地  
地花のそよとまよ其役配らの靈験大可たると  
神筆の使つとそよとまよと奇ぬと地花星額長老  
法師のつらと一体高下ハなぬと本尊石佛辻堂佛と  
合せてそれお意の役割をそぬとまよとぬとぬ  
前條に記し居る園信より陸上登りて途中にて一僧ハ



るありてふと、先其路を何と云かとう昏をたまはまらぬ  
白奥は信乃は堂の奇異とて先きよと路をいひかき、後は  
番曲を講とて、奇異は白く、黒く、白く、黒く、白く、黒く、  
其路をくふと、候合のやうは昏をさる、其ふよこのやぬら  
救難の一倍花よと、ゆと、ゆと、ゆと、ゆと、ゆと、ゆと、其  
場そのやうよよのめ、ユ人、ユ人、ユ人、ユ人、ユ人、ユ人、  
狂又か、こつと、ハふ、こめ、や、や、や、こ、こ、こ、こ、こ、こ、  
者、副、們、よ、は、と、ろ、ろ、一、町、許、と、有、り、る、れ、下、は、ハ、ウ、の、路、を、伏、  
き、多、く、あ、る、ん、ら、同、行、ぬ、と、あ、ぬ、し、ま、ぬ、れ、と、一、町、し、え、と、ろ、ハ、  
祝、美、ウ、の、告、は、急、き、走、り、ぬ、ハ、ぬ、ハ、一、孝、副、們、は、彼、告、ハ、か、く、  
笑、て、侶、よ、走、つ、つ、ん、と、後、と、ら、ハ、七、と、め、ま、き、や、ち、れ、と、紫、ハ、  
自、我、か、こ、る、へ、き、い、ま、け、ひ、あ、る、ん、ら、狂、こ、れ、を、少、く、か、く、ら、  
た、れ、ハ、ウ、の、強、砲、の、ユ、人、も、あ、れ、ハ、あ、る、勿、論、也、七、三、人、の、か、く、れ、ハ、  
と、か、く、し、祝、美、ウ、の、告、は、急、き、走、り、ぬ、ハ、ぬ、ハ、一、孝、副、們、は、彼、告、ハ、か、く、  
と、有、ま、す、ま、か、神、傳、危、難、の、事、の、こ、も、あ、る、ハ、其、人、果、終、を、  
告、る、其、終、を、い、く、し、今、日、の、急、勢、や、ハ、告、を、さ、ん、と、  
今、し、て、後、皆、そ、れ、く、ら、い、笑、へ、ま、し、言、約、し、て、諱、く、は、ハ、  
移、り、ん、所、果、し、ら、と、行、ハ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
ハ、つ、め、と、狂、こ、れ、ハ、ハ、濃、く、ん、急、と、告、る、其、場、ま、ま、  
こ、る、も、お、法、あ、る、と、思、へ、ん、人、も、有、へ、ま、ら、ん、と、い、ふ、く、

るありてふと、先其路を何と云かとう昏をたまはまらぬ  
白奥は信乃は堂の奇異とて先きよと路をいひかき、後は  
番曲を講とて、奇異は白く、黒く、白く、黒く、白く、黒く、  
其路をくふと、候合のやうは昏をさる、其ふよこのやぬら  
救難の一倍花よと、ゆと、ゆと、ゆと、ゆと、ゆと、ゆと、其  
場そのやうよよのめ、ユ人、ユ人、ユ人、ユ人、ユ人、ユ人、  
狂又か、こつと、ハふ、こめ、や、や、や、こ、こ、こ、こ、こ、こ、  
者、副、們、よ、は、と、ろ、ろ、一、町、許、と、有、り、る、れ、下、は、ハ、ウ、の、路、を、伏、  
き、多、く、あ、る、ん、ら、同、行、ぬ、と、あ、ぬ、し、ま、ぬ、れ、と、一、町、し、え、と、ろ、ハ、  
祝、美、ウ、の、告、は、急、き、走、り、ぬ、ハ、ぬ、ハ、一、孝、副、們、は、彼、告、ハ、か、く、  
笑、て、侶、よ、走、つ、つ、ん、と、後、と、ら、ハ、七、と、め、ま、き、や、ち、れ、と、紫、ハ、  
自、我、か、こ、る、へ、き、い、ま、け、ひ、あ、る、ん、ら、狂、こ、れ、を、少、く、か、く、ら、  
た、れ、ハ、ウ、の、強、砲、の、ユ、人、も、あ、れ、ハ、あ、る、勿、論、也、七、三、人、の、か、く、れ、ハ、  
と、か、く、し、祝、美、ウ、の、告、は、急、き、走、り、ぬ、ハ、ぬ、ハ、一、孝、副、們、は、彼、告、ハ、か、く、  
と、有、ま、す、ま、か、神、傳、危、難、の、事、の、こ、も、あ、る、ハ、其、人、果、終、を、  
告、る、其、終、を、い、く、し、今、日、の、急、勢、や、ハ、告、を、さ、ん、と、  
今、し、て、後、皆、そ、れ、く、ら、い、笑、へ、ま、し、言、約、し、て、諱、く、は、ハ、  
移、り、ん、所、果、し、ら、と、行、ハ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
ハ、つ、め、と、狂、こ、れ、ハ、ハ、濃、く、ん、急、と、告、る、其、場、ま、ま、  
こ、る、も、お、法、あ、る、と、思、へ、ん、人、も、有、へ、ま、ら、ん、と、い、ふ、く、



思ふぬした右川と諸川と其間へくると有り諸川と神傍り  
告のよた右川よりあるとよなと前刻しお刻くして  
危難と告る神僧よりいふとをーかの持てのる其  
るのいしあるるもあふよと大并は諸見か子今まると  
よお終るといふあふよとていふくよれハ今日よりある諸川よ  
て神傍り告るよとていふくよれとていふる中あはれ  
いふへんやぬんく赤知富山に在はよの奇異ハふとてんく  
格ぶのよしお輯妻友再致房総の修る照文代にゆき使  
命まで政本狐よりいふあうて照文く告るとまふんいふよ  
ふといふかそれと是もた可まあやふあふくこの修るハお輯

のちにお用の節といふちハおまをさとしていふくけんく今  
してはけてし子おあふくと大ハの記さう奇童の記さふ  
成しててあて、大諸見か子今まるといふハの記さふと  
わろくをいふあふくくまると又奇まあやまかふて  
諸人より告るとまふてふく深臥のふと今まるといふふ  
よと持てのるよあていふく今やよはいく皆あふあふ  
武男のみあふハお奇と今まるといふくめく一此ぬと又  
おまのる有るをうハえんらふくおまうくハ今まるといふく  
前知ハをまふとあふーお輯の老狐と此の神傍りといふ  
けりまの役わうていふふよとてハ伏蛇とあふくやうなれ







其智慮を合せて有りては限らざるを以て大士の  
智識英武の如き有りては其得手くして論の上  
に各論ありていさぐ浅深無きものありしや  
その所の智識はありては大小の別なく高下なく異  
心とありて皆して有りてはさういふまでも有る  
ことと眼を有りてはるを看くことと茶のついで  
感とありて照文代は郎の諸大士の教を以て知  
らざるはいふに思ふもあやうきこと一人といふこと  
るやうしく又地格より水中を撿まざるも老翁  
の屍骸の如きものありて端利なるは伏兵の有り

を以てはあ、大り退路を安くしむるの要を以て  
けりぬれぬるものこそは公を以てせしむること  
七犬ありしれは公配までなる及ばざるは  
此を以ては他作あるはこれとよめることありて  
勞せん大りは目より有るをかくのめく教を以て  
空文代は精細を以てしてはるやうに即著公の精  
細を以てしてはるも筆を以てしてはるはえりて  
いと感服しぬれしやあはるることありてはるの  
いくとくあるや○天部善神河修羅は克てこそ  
しては此比喻ありてはる其形を以てしてはる



後

おぼえてゐる。思文をよと抗け招き殺ひあちて  
 おぼえてゐるぬ文句くくふおとろかく有くは又  
 紙上よ其人あつて又さあぬくおぼろく。おめく名のり  
 ておぼえてを拵て顔をまもりふ終の喜ひいさこそ  
 くとも又あふくくくく代四郎の含笑あち  
 とひ有り時あつたは八犬具足いさく如く二十余年の  
 股稿機いさく小園園、大の宿るさくともよ  
 著翁の構思と虚くくは八行の玉聯串してさま  
 光あ、筆功成就誰か殺ひおとろく賀さへしく  
 ○豫て庵主の教訓あぬ二個も敵を殺さくくくく

前

士撃卒の外、犬士のしして殺や二人をいさぬ此園我  
 中の一園目おちりくも唇まうくくか刀人殺さくとも殺  
 不殺ハえより自他あへきを棒し小杉木に鉄筋の控用心し  
 趣あり殺伐の僧助悪の僕さぬ。後とけく結紐素  
 ども有まういさく幸やて来さくさくさくいさくとあもさき  
 がくさくさく首悪們と犬士のしして何とらわさくさく  
 のるあつたぬ追放つらさくさくあんまぬハつまらふ用  
 のものを星額師長の易へおとあちさくさくさくさくさく  
 ほうはまてわさくさく犬士の猪ぬいさくさくさく感むさく  
 ○道言が社今う先登さくさく二隊よさくさくさく中の一人



つぢれはかろへきをぢれとあよ、大う令せしとさいひん  
二人の妙のうらやまひとひまぢ人よくと「**○**」**○**道節  
う生に毎と先覺祭祀といひ憐しむかの、大う令を成し  
とふふう早まきかろ係の果敢かあまのくつふまあの  
しきひぢれと一笑せめてめここし信乃路傍小堂の奇  
異記屋一路児の巻令あめく其うといひて餘談の後  
よと例のに中遺なき華ことさう教房うさの看官  
るあやめと信乃次段をえそへちとあう是て慶寺  
をばきみまうくましく語らせらるの華の配うらうとハ  
ぬこ説話聚議のおほる中へ半はくてもくかきませて

さうもあしとくづつうさいふもおめくさうふことお如く有  
へくおとろくぬを誰うさかくるん感んこと**○**花介  
照文の祝族なる小文吾教屋よの対はよくとむ縁つさ  
そハ又おとさあせあれと教房跡きよぬあことふ  
それよといひあやめてその情をうけはう**○**左右  
川のさあまハ人あつて耕さむ仕客行逢え旅人又驚た  
る隊伍の感んさそと是も眼まらるくはれも往  
來の要路あれとそ人のまうさうい教屋うさこと言ら  
ありそのうのぢ人もぬけいさかよしかくまも持ぬぬ  
かな**○**聚議や諸川を一曲して路傍の旧院例の



智囊の毛序に裁配議ハ諸川を議に入きせんとす  
此人救生物之を幸きて飯店に憩入へくもあぬと  
路傍に恰ぬ舊僧院とハせりこみいふも奇事歟○類  
寺の景状ぬ文にまろふつくせりふ紀二六庫  
裏のうしろと云ひつらうて老僧一個の在るをうら  
るた人と何と云水滸尾官寺の僧と云有る地荒  
供へ土器の底白を茶面の筍ふはと云すしてハ  
らも只廢ちぬやう時候の事あるとせぬと云ハ  
文句は念に入てあれと云こよハ誰も云つくま  
何と云く又云云云云云云云云云云云云云云云

奇事あり草を刈りて遊ぼうと云はる  
ての用のみあるに怪しうあつてやと云うハ大々  
を上げた却てと云うと云う人の事ふく  
と筆のころ云○我飯の事ふく云云云云  
あるゆきと云ふも宛然と云るを云ハるも又  
その事ハぬと云死あるとハ云と云るもあ  
かるそ外の妙趣向地荒雲驢の施茶又その二物  
はとう其用を云うて奇事歟夕饌のころ翌早飯  
のし餘ありまてかまんとハ云その事云云  
奇事すして昏るやれハそ外ある人云ハ云云



奇もかいたるのまゝあんなや奇中の又奇すきまの  
おこより敵深伏線形又微妙の深きもあつて  
いひつくさぬ妙甚向あつらふと感心ふりよあ  
まぬ妙こし 地花とふ地花は時節きたるるに  
あぬ中よおぬの地花はさるるまゝに世萬佛一衆を  
こよ位をたくえんをて必用よ宛らり此二役これま  
なきていあぬ役へ軽んさんるるしし ○信乃々  
あよ後よといひらる辻堂の奇異を我飯要話は細話を  
さちやお世工人はぬこ徳用々鐵禪杖のかこるる  
るるハ早き談話の序文こととるよそのつとを論し

このことよあつとあつと大角々論よのくひ合はるの  
龍虎の勢の結算のつまりぬわさよあつとらこむよ  
かよふの段取やそ一度は推捕綱々のもそらで勅凡の  
こくれともらんねうやわらう 他作あつとよくせよハ  
推捕こむよ信乃ハ八方よあつとらて奮闘を看ま  
てのこも勅凡を吹らするよそも有へさるさてハ危きを  
助るよそわく勇よさるけあらんらつとら神助  
いつれよも助けて吹まハ有なれとむらかこむ吹こす  
工人を言さこわらうこあつとら勅凡ハ大敵は似  
隣て吹き結ばハ影實の毛もやうと信乃ハ敵とらん



より吹滾るるふて圍きこ迷ひ路傍小堂よたより  
つこもるふと危我の助けのこあるハ信乃とをそらん  
遊き吹あんと吹まとたさう辻堂へ導く神助の奇  
奇妙用そのさあそそ著節のきうと妙用とをくしよの  
自をを自をよ唇より老婦等他人の乃とぬこころ  
ちうらふ面部缺く石地瓦頭中の牙頂の残かひて  
眼より長老法師いれこそと妙奇異ハさほと驚き  
おそよと妙采ら妙その幾十人の我飯の用ありし  
とハ彼かこよ誰う若友まおとらんや又よつと  
鬼神不測さうとてハ妙く今よとめひと何らん

感心感服の施行のこころハ有漏の縁と論こころ  
論してあれとえよう、大士們の名々のたのよせ  
らハ善百報一粒万倍自れ冥助とハはそあり  
さてをこそハいまこ我飯のこころハよく照驗のため  
よと拿り本もとせらろんさこそ有んきふ化作あるハ  
唇まいきき餓くるばのためよく信のう智あつ  
くむと唇をこてうつてを味よあそへきら只照驗よお  
あういまこ其話までよ及てあう我飯の談あつ  
恰ぬそれ有ると其話よ乃よのお前まいつて妙人  
味いもほこし采のこ拿て残ハさうと采の代りよ



と金一分を結附呈くせらるんはう精家のくく  
此金珠のくさるう後修よんすまかの経巻五十人の  
逸正寺へともりよて是も誰へかまひの者筆せ  
られしそまぬもなれとた曰くハ後修よ未得廢  
ちまうの師をよまらう又てこれともふおろるとり  
何とうかとう経金日記のともり何くまほしうり

○北月のこの歳月をらんるこの誰まもせてやハれと  
常言よまらぬハ有縁のむらハ信乃なるまらと日  
くめて即後詔の伏線おハ例の煉筆むら於豊山  
の鐘上虎兵の石これ又信乃よてたこの文面の編

色よともらるよらうー○徳用うふを撃んとて久  
つて出本今を撃手殺き面かーふとてハ小堂中進退不  
便利あるのふえを撃しからで左右ハ解もたて撃手と  
わハちとせとあるこらやこまぬハハ信乃ハ  
本するハ前よあうて衆徒の幫助をたのこらるさねと  
此れ撃手からとあやまらんようハと解もたていよく不  
意を寛びひくさもあんこらうこたつよこの間  
拍子よハこのぬくあうてハをえあうては利お生拘るよ  
経後ま頼們とお部らるとらんハ出来介らるハ  
名もそくて画面のいとも名土壺よ寺とことこの右



たれいそねそとハ誰うかひん只その一役の者として  
見よまよつとまそと七跡のその者ありハ妙く意外に  
のそねのそまそと三浦とヤセらねる精面者のそのれと  
又おハ忘しちハ此老物ハ此結果ハとらとハ家心か  
とらとハ跡中二回又ハ魯邦と宋魯の勇参そと  
とこれをもとまそと初巻の一端ハ結をねるハ此邦正  
論あるためよもそねと一巻の目名とかのそとハ取巻を  
昏と一とまそと有まそと長跡のそとハ安西ハあ  
あハよおのらとこのま今とハ要小厨ハ要小厨あ  
つとむかこののまかあのハ一巻はまそとてのま

ありつんを妙ハ這奴ハ精家結果をねと合せて此論を  
結をねるも有ハそと取をねるあぬと何とせよ煉者の  
妙ふく感心信乃と道そと和教ハも又精よ家あり  
とそ他者ありハ此精と合せて必道そとハおんあてとふ  
それよと昏へまそとをつとつておほえとくハ大と  
おあま有りハ此時めとぬいとそと此書そとらととハ精  
家筆そと ○徳用ハ鉄の庶杖を夥兵們ハとこと  
と二人して毛指と毛指と笑つて益のそとあま  
とおとらと二人指とあつてとらとは徳用ハ金富ととく  
又大角の論ととらとたそと多力の徳用とと中一付し



しる信乃ち勇し又つあり兵部のかよひてふまへハ  
おもえいりあひとおもて大角と国羽と青龍刀の  
話乃ち乃ひてお論あつてそのまへに昔のあつた文  
の餘奥あつてくしておその置械さつめおひつるけ  
ある武田のゆいもあつて又例の二つのあひ○  
そよふと六鶴のあつており信乃ち其族の庶杖をお  
ゆえと夥兵們は今もいへるゆえよまをいへる只話  
柄までよとていへるハ毛野のあつてまへに昔  
さつてくつ族棒ハ勇士の兵器今も用ふへきものな  
とかの論やの意も有へくそれハ武士們的の神力を

ハさつていへるハおもへるゆいといへる異も置械  
ハおもえらるる有あつて彼國羽と青龍刀ハ馬忠  
といつて呉将を捕しておつておつて敵を撃  
てお捕ハえらつてのあつたを其後と好ころの  
まへに今も武士們的の兵器を捕やするハおも  
ぬやうに村雨丸ハ餘は置械さつめおひつる異も  
道さつて仁田山の馬忠今も酒殿の槍其時よあつ  
て用あつておつておつておつておつて其全は  
やあつておつておつておつておつておつておつて  
おつておつておつておつておつておつておつて



食らざるの清白とくぬめくまふくして昏とく  
くもあらんく

百二十八回

大う左右川の方と遥拜してさて座まうりてまふ  
ちうたふおま奇め利益を人こ同アツと感入る  
中よ先おひひめんハ、大うあ役そし先つ地を遥  
おしさてまハ、おまろくの願おくも茶かくこそく  
石像の雲異凡雲の天助を感嘆しつふ言義成胤  
智と少く思ひつるハ法師の言は唇もくろそのの  
用公眼を留むへー○道節う獨なき野陣よ我

飯を炊くの法又毛狩う筍と自生のまこまお其  
味のことよ美ぢぢぢり不用とやくくと譲とるぢぢぢ  
をちぢぢの文趣をわぢりくり二るよまおして  
ままきるよて例の浮切炊法もろろの司筍のま  
驕饑の好事を教言むのぼんもあへー筍の法こ  
よつろまのそひくさてこそとめ巧居んその辰に既ま  
條まひひふんハくどくハこまよ又いそと頭茂書とめ用  
おぢろろ一筍のま紀二ふ馬毛せハ令せとくして信乃  
令しや伐やし蒸くこるま教諭をなと何そら  
るまあふとそらふそのあやうまおぢりく















あつたまて感心のつちあつたし昨宵准佑の休捨を  
々々夥き們り来しとさうちり居ての御多しへん  
今やひとあのみく火後片もようへんふきさうく  
おやろしといてゆい強おの下は弱兵をくこぬら  
ゆいせらるところ大士并は照文の貫目も自代こそ  
アそあり休捨をぬも又一羽かり火さよ灸よさ  
といさりと遊そぬ筆あうなさて休して小山を待  
よハ休捨を棄て列せしるる久小整と懐おのそ  
るる想像せらるる大士みろる巻くして紀二  
六をよていさひひ正大もろくこく○朝

重し又恙童女ていさひひかくこささて  
朝をういてささところ大士を叫さるめさあぬ  
おさう勃然ことろし他し朝をさるるさけぬ  
あふく驚くて叫せし大士さうさめいささ  
ふまよさうといひさるねさしあつては何とや  
軽篋せしやうは笑ゆれ相重と云て叫さる  
こて答へるることろしこへてお應対双方も趣  
あつておもしろし○三門覆えくさぬるおまら  
やうも有まれと何軍に誰やあつて書名も人名  
も志しぬと城橋あつて柵門あつて柱を推して



ゆらさるふ上あ兵士くくつて走り進みふふと  
のちくまやういおほゆこさぬくの奴はく神カ  
弓は月のみ朝の一箭は巖を破りま同く作りお語た  
けよるゆをいまごと大きく昏とつる何條るうあらん朝  
をさめてさごとひる先ら勝負をえせぬさむら  
らんちぬと又朝をの驕慢あつと老成のささるをも  
昏とくぬく後回の四九三郎り必とさるといえさ  
果て後者の罪さハぬく似合くくぬやうも  
あれと時よとつての當話よぬと朝をの老成と  
敬神信佛さくぬハ頭よさうも思ひやうらんそハ

よあれくもあれを不結城の追隊来くハ又一合戦  
とつ不老成の朝重平和よさみく其平和妙ハ  
ぢぬと来くさむくつてさくくと和談までし趣あ  
ぬう一合戦のわさう古戦あつて奴はく二男くわさの  
めくさうして和談の段取ハ趣ぬくうまいせのこ  
あよ武士們の角門より入るハ只その荒廢のさる  
まそとのさつてさうハ其觀染よ有るをや猪ぬ  
こ深ぬく○朝をささ下靴奴五人のこを裡よ  
みさかのお拾のささうこれ先つてさるぬと  
○二の所は似て二の所あつ骨相さそで強優して



こそ美くしきお扮と行装のまうとを看ましむるよ  
有かれと此言なくと大士們的まよふるよにあらて  
ほろろ二番朝重よぬけ花をこそとてんこし  
とあそむるよ指月院の武田見参めそれより七暗  
ちりとあはほとかれ朝重とてちるほと大士の  
晴るいふくあらん狂朝重にぬいさゆさばま役  
うして此場よおいて二立者八大士よ対敵して高懸よ  
る存嗣と伯仲よ又入きうするよ其骨相牙う  
さと看まありて好しとにましく又お扮にまされとく  
らてお考もるなと飽るを世にせらるうしこよ

十分朝重よ本奇をつけて看うとくろと誰か大  
士の上の所とあめらん○指月院よとあふさふさふ  
か一ことろと正對よて狂れに前立これに本尊小  
子看ま大よ看ま自由の巧文妙意なるを又何やま  
て重複なとあめらん人のためとくく自注するのそ  
うやうその一文趣をよもふいふふあやうふ 彼  
二人の下部うおるもの華席あんとあめし〜朝重の  
準備感おせらるるを準備せらるる著翁の準備ハ  
狂又威を朝重、大武士の問答例の言くとくいして  
條理分明道中信乃うめくふと又さうよふとをし



○惺利剛九郎の二る奇めし朝重其罪允一々きよ  
しハシと刑しあてて大士們は又ささとしといふこ  
因へあふ後刑せんまハ此二人も同罪といふに解死  
人としてささすまといふに解死して大士們は殺さん  
と又いふにさふ渠を活してあてはさしあてらむは  
孝嗣們は連恨を解くじところを渠々自業自得  
双方のぬえ人の奇めし感心し且乱辭のふといふと  
一所の口角よりくのお識者ことよ又敗軍の疵骨  
を斃ひてもあふれしと斫んとてうらうて殺されし  
ふと渠々さすのほともあふ剛九郎又論は及ん

類を以ての悪識損友文外警言の一つもあへま  
そハともかくも女奴作畧くぬ感心ぬ○朝重  
うこの言ともして公すく私をく克己とやふ  
聖とともかあめく感心し成朝賢主をかめくぬハ  
命せしこそあかくそ有らん旧因をあめくさす  
こきて敦厚梅さし主徒賢良氏田より一寺  
上としふまきし大士們の言との理義はもろろい  
をし一狩例のあめくのをめくを昏まける是は同し  
いふとをし○そし例の僻はあり朝重は言中彼  
法會をや知ハ資もさすしよ告られハ是非



は及たんとその身よそのめりんやれと此言のこをハ  
かのれハ宗親ノ飽うこそそのけりや、あつハ貸けて旧因縁を  
し強へりしは若ふくてあつてもし迷憾いふおも迷憾  
かのて法會を告しせと堪と決るお貸りんハ邪  
僧奸臣非邪非法の二奉初ふと云きところをくん大  
名字を戮ふの道心ハさるるやれと他領は法令既  
嘗てころと告さうしぬうよう此一駭初は乃びひころ  
邪お們々非法ハよままでをくれと、大いしあやまら  
なまよハあつたと強辨すして論せと論とへり死教  
玉のけられハ治者を以てハいふと云といふ不念ふ細

はこ既よ、大い其ぬらうを後悔の言葉ハ何うさぬと  
るよ朝さう此二事とことさうよ咎めつよとの言と  
ハなくて知くで改りよ及たさうしその迷憾のこころ  
ハ告ふと邪お們々非法となく法道子ぬをく  
へまよ今さう是非よ及たさうと云それとなくして  
一言ハばすのふんをとかさめていひし、大居士們うこ  
ところもちろん此義をゆやれ、其徳耳ハ賢とを教め  
あくることハもつる道徳を極やれと云するハ、キヨトあま  
へてるし大士們ハえようそのこととて皆ださやれハ  
狂さうよこらよ言と今寂なく自然さけくや



ゆぢれハ世にあまのまのまのハそれハ討つる朝きの  
カしてて於又於世の貫目ハあへまよむこと  
なきハあれ竊ハ何と飽さあほむと但し朝をり  
こよ本とてハ号あハ既ハ守りあれと於其あれを  
向らんあり成朝の本と旧好を於ふハかりさて  
あれをゆけハいづくつてハ大丈夫理義をぬる  
よ於る和平とあハいさうと口を果とあハまよ  
なく先成温和ハまろくともあハこれ朝をり朝を  
しるまといふも於世の老カむることを止所ハ春  
して浮きこのころもあハうとえハハかりいひ

しるハ僻言もあらんハいさうとあハまよあハ伊勢  
人ぢれハひくことえぢりあらう人足し評中の一頁ハ  
あうあらんハ○未得後ハ又あて必を用のあるハとえ  
くても思ひとらるる事と今世ハ朝をり供ハあらう  
罰傍們をおくあらうか五人之外ハあらうハ十世  
の甲斐異のあらうあハいさうとあハりし吊甚ハ  
仰なりを祓をりけれらうと三貌三神ハかみのみあれ  
しと醜状おしとさくとおふとをりくともあハ  
とあ十倍身をむむハハ茶茶のめく祓捨らうかしと  
こそハ皇額ハあめちとあめまくハあむらうこの



くむ今も有りく系 経を財臺のそを照据え  
せりふく〜但し之れ既にあふそあふは二おありそ  
星額們ちるるふ照据とて〜又驚くも  
大居士們のつ々ところぬ据よ狂ふき靈果を驚き  
感さるさふハ如二照据ハ又おのちあつて大居士們  
たふも〜は〜は〜伏線と云ふ照据も用ひ〜は〜  
さふは是と云ふも文の法は〜は〜所よ〜  
の工人とあむいあつて〜は〜不測を是と示  
我伏姫神の〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
を多弁せよと趣向〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜

徳用們云こも後〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
這奴們も必かく〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜

百二十九回

未得う十地をのあむ〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
於に餘能化院再具と十衆と〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
死のみま〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
は司ら再具と如〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
の初定分重埃と〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
星額ら寺号法号又その師の〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
言〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜



あつぬ大人思子も此解なくハ用を伝きをわづら  
うんちの星額も神化現ハ只地蔵の孫のみと思  
ひとりしは此庵寺の院号とあるとハ狂又それよ  
しこそ縁故とあるとハあしうふく○信乃浄  
西のふと問あふいふも問をどハあふくはさて未得る故  
ありて志とくと具工語ありおと工々奇とあつた老僧  
子條の用あるハえよりとて此話のため又とつとも必用ある  
ほよのよぞれくぞれと好用自在とつとも感心○淨西  
影西又子の七よのうりあつた外をるもとあつたり  
とてみ進骨本初路信小堂の根由を明とつものことあは

それこそあつた中巻の一大佳話奇もあつたり  
ものよ何やん意外妙と前輯名劍のつりして  
赤子基射虎の話よハ法會中よめとつり武徳  
の奇談これハ石佛のつりして戦争後よとあや  
ち中巻の二頭話とつりと外ハ源氏の佳話とてと  
も又その源か子因あり縁ありて忽ちつりて名はあ  
らととくハて後とて名劍のゆえとあつた此話  
こそ透骨とつる縁故ありとつりてあつた對あ演出話  
感心よとてあつたしとつりて遺骨二玉器の根由  
十八の淨西ハ執忠のちとつりところとハ奇絶いとんも







古通もあつぬへーとぬこぬ又あ梅は星額も持  
つるも鑑もつてはささうもやうくつらうへうま  
つきて工人さうきぬし感んぬ○浄西の孤忠道も影  
西の深き誠実此條の二長話季其甚哉没のそめう  
して影西都工顯職するまでそのあひまの許多の段  
取感さくはさぬあへく憎むへくさうさへく積るとぬ  
さぬの奇執ぬあさよ一筋の忠孝傳そのあひまひとく  
奉あいらんも中くまを只感心の外あはは終の事  
状一るとしてせつとるさく精しく細くつらうさぬ  
つくやぬらうふさるまでと外は長話とつてよたき

まぬらうその忠孝傳のさあやうさぬいさくさぬのさ  
なれはさくせつとるさく又語路段西の間拍子あへくは  
勸まは節義とあへう長談義とも侯む人あらんを  
段西語路間拍子までせらるゝのさうぬこあぬあ  
せぬえ侯とさうさ今かーせぬとさあぬとてうま  
くもさる外の妙佳話○十八の別度はさぬの能く  
影西祝髪と未得住持の年とせぬ一年敷のゆえあ  
せらるらんせぬと未得よほの老侯せぬとせぬとて  
子あしあしと衆位と未得り代と段西あへうよく  
積るとらぬのさうも教きよく又逸足寺とるさ住



未得法脈の工人とて何と云ふるもあらざることを  
煉華巧文の二語も感さるる○寺職とは用は憚  
て教西はゆるりたるをば用は憚りてよくあひて教  
西と毒殺せんといふ志あるは學と道なりとせしむ  
は用は従来もゆるりたるをば用は憚りてよくあひて教  
前輯と合せて全一とすべし然又は用は結城再興は  
小功ありしるるは前條朝重の言も有りかしと其功  
ゆゑは容赦ありしはそれゆゑは憚りしとて其意を  
知りては余儀をゆるしをいへしめて結城は未得のた  
めの解華○信乃々さては亦う始はむひやくきハ前

言の結ひのこゝろをさるるをての地花利益等縁ありと  
おもはるるは十地花の因前條はけり大まやくなるの物縁  
ありハ前輯より未得の言はありは縁とてこそそれと  
あはれいまこゝろをぬ前輯は十僧衆とありて法會を  
たすけそのよき骨遺刀里見はぬ法會の利益  
ハ大ら功德ありしとありしは外はぬあり  
此縁そのの因縁ありて行ふ二物の其根由ハ忠奴の  
言をあらはるとはまことと外の事として念ふ念ふやめ  
たりとてハ面白くも深くも構思せしめしむる感服しく  
○紀二六よりえたりし白屋の老法師ハ洋西に亡現まら



有るうしとありくおほめりして尺目とてりしなりし  
淨西をよことし形貌とてりし其誠忠ハ未得の  
話照据ハ逆骨きりき鑑お霊験の石佛ありしとて  
かろしハあろりの文上ニ満こいれはす十かよひつ  
へしとるし何んか言つてりしとありし  
但しそのこととてハ惣所と安内とてりし  
と何とてりし何とてりし役目ありしとてりし  
とえ有ましそのの役目ありしとてりし  
一物ふえてりし混雜ありし庚申山は一角り霊現ハ  
一事を托せりハ雙言あるの枝死の覚魂顯形と告

さてハありしを淨西ハ志を成りて善終せりしとてり  
しありし忠切を衞ひたるのりしとてりし  
んはハまき骨二おのゆきとハ告るをせんせれと  
未得有ることとてりし又地底霊果の其中ハ生すゆき直  
の老ニ魂とてりし混雜とてりしとてりし神助るを欠  
き亡魂とてりし使役とてりしとてりし地底  
本基とてりしとてりし因縁のありしとてりし  
おしてありしとてりし今とてりしとてりし因縁の  
とてりしとてりし教ありしとてりし  
とてりしとてりしとてりしとてりし



とて勢多勢多と役を侍せしハ衣至極の類をそせりし  
おとろし其廢院の惣所ハ毛羽の計議ハおとろしと何と  
せん忠魂の暗し汲りせしとと勢多勢多とせしと余情あ  
つと遠しといく外におとろしと又切のる地元の面影缺る  
ハ淨西にあやめしとと者たれハ稗史は所ハ盲目たると何  
とらや淨西あやめしととやうも方々又久し徳軍地元化粧の  
僧三千とらうして色白きハ影西の容貌のるハ何と  
あらしと久し年數人々もさしあらしめしと端正僧  
星親老僧のやうしとあらしと未得と比しふ比しつへ  
かくおとろしと常法所會しとてるよとあらしめしと何と

三佛と三佛ととほひ合はれしところも有やうし  
○勝軍地元の一僧とと一佛して奥にせしめし面白  
く感心し地作あしハ大さハ何とらかとう目定とととて  
合せととまふし有人きし件ととらあしん有官ハ前條未  
得とと言し徳軍地元持し本をさしとといひあしハ一僧ハ  
それあしと推知しと有けしとたらしとそのをそるしと  
あしと奥とと又一つめし合しとせしめしとらかこのもや  
あしハしとととととと一佛ハまぶあしめし文面の余類あし  
ととととととととととととととととととととととととと  
いととととととととととととととととととととととととと



服しし未得り悪衆徒と吊其基は載せ行はるるのよ  
めと詭する手未師檀の好あ、小山よよのり相重先  
巨し詭すのあしりま入師檀不師檀のまきなるの他作師  
檀とすてハは唇しとるを著翁のこぬのるると深文しり  
しつぬるふ同一ま逸正寺の師檀よ悪ハ悪師檀善ん  
善師檀好み黒白あしとをまぬて将又さんく徒房  
の悪寺中の醜と告るハ師檀のよみあつふふし  
るらあしとあしよあしりし何とらうもあぬ師檀の  
一ういそんくさるぬをまきぬるのあしあし深文ふ  
らまやめあしとあしぬとささるる天物言は一笑し



大ら影西郎うあん日の言傳よとまは前まき方のそと諸  
りて未得よ托もあるあ條未得り変曲話よとあしり  
二おのるぢれハ新あぬのそはハ後しては未得よと  
諸よあしりまきとむむむとを言傳よと諸よとせぬ  
浄西う思まむふしに二物里又よぬとあし新西い  
よも新ひあしとと直話やぬ、大ら速憾ハあしりふ言  
のぬんふれハそはたむむと未得ととあしり影西の  
おむひよ諸托まき情意もつよとあしり未得よと又必  
かえりまぬるぢれとあしり未得よとあしり  
しん未得よのころとあしりてぬ新西よとあしりてよと托まき



よしてはるは向いふもよしては諍の主と客と情意軽重  
たうらんぬららの深き用ひ威か忘る威心をいひ  
かくるやうは昏としてあること又そこそくあること  
あつねれさうてはいつや胡椒丸呑何の味さうさういへ  
まをさうさういへさうさういへさうさういへ威かこ  
つとみさうさういへさうさういへ○萬佛一佛田毎の月并後  
えんさう動きさう一教十二箇をえんさうさういへ自在の  
役割さう今さういへ佛一佛分別あつぬ徳利益明あ  
自注ぬさういへ○未得る徳利聖名いへ饒一とえんさう  
未得ハ十要衆後のたのし相違い佛さういへさういへ

恰好さう役さういへさういへ此時双方おさういへさういへ  
有るれとさういへの饒一を相さうさういへさういへ  
あつて未得るを役さういへの都合いへ未得るさういへ又何さう  
かさういへ教いへさういへさういへ昏さういへさういへの自在さういへ  
自在さういへさういへさういへ未得るを借用や又は佳話のた  
めさういへさういへ借用さういへさういへ自在さういへ自在さういへ  
自在さういへ道さういへ言さういへさういへさういへことさういへ激言  
と和語との趣さういへさういへ教さういへさういへ比喻言さういへさういへ  
いへさういへ簡さういへさういへさういへ誤脱さういへさういへさういへ  
さういへさういへさういへさういへさういへさういへさういへさういへ



語とて入るありき道なきに教を向ひおぼへたまふ  
毛也小文吾世介を向ふてこひ漏るく十字ヲ稽細  
○生擒の繩を解きとくごのるす双方れある今も釈あり  
犬士あるふ朝重やうふ感ふこしてさて此籠ハ未  
得くし大よむらひてをしるやれハ又ハ大より未得たらふ  
へまそちやを皆共侶ハ朝重よむらひ目今の議をせま  
た手ひ一飲こそとくぬよつあむもくふ此れ座をつらぬ  
てのるやれハ必かくもあつきて又其所このてふまより  
順をあつて昏るぬ或ハ又かくたつつかしとも昏る  
あるもちろん此れのをこつとあつてとてくすはた  
あるもちろん

さむ詳者縦横妙用活文感心ありく○朝をう還る  
をいひ犬士ヲ辞謝又ぬめの酒杯も天命の使むれたと  
そつとらひむかりをあつて主客のれむととてく双方の  
その情誼をあつてまきりおとぬ礼讓感称  
ふく面白くするはたくと高嶽の孝嗣との別とに並  
らてそつとらひむかり○成朝朝重よまあめをやめ  
賞感捨るこまどひあつてもちろんさこそ有へまむれぬ  
さつとらひ端とあつて後は西僧二使往來して西家旧  
好を移すこつとらひハ大菴の二開りあつて其れと  
ちつとらひ、大々道徳犬士の智勇於此に雲霧驗







影西と徳用と善悪の反對と云々一〇影西、  
大朝重親善照文們往來して西家長く脣齒の国  
と成りて既にありといひしなり。影西ハ許さぬて大山洲崎  
那古富山本基の廟墓伏所の霊迹へ詣つる事  
有し一出家行りぬるハもろろんちんもれおのつら  
十八の旧因縁と者といえんや朝をておとて脣齒の  
家臣久らいつおといそるも参詣所とのみ子おとあま  
しとれと朝をてておのくの拜参をえしなり  
その事も云々一又、大ハもろろんお善照文と云々一  
能化院辻堂鑑塚は西墳三土へも訪つる事ハ云

よりて道路の順路ありお及路ありと云々一  
縁あり道折せぬハお文ハおとてし詣つへまじしぬる  
そおまをそぬくよりををりて各まあるふと朝  
重参詣不参詣の事ハ右のぬくまあるも只影西と云  
と云々一またてそと云々一物おの敷うと云々一  
外ハ何の事も云々一お善照文ハ結城をて彼参詣の  
る事とあり朝をてハ何せんや云々一西国旧文お  
成しハ是を此年の朝をて役目と云ハ外ハ又あり  
へくハありと云々一とありと云々一と云々一  
と云々一と云々一と云々一と云々一と云々一







獨りくひもせらるるべし○二侯の將軍地をばしきて  
るまを靈果をばしきてのぬ、既よあよひくろば  
なぬくそをちりいける結核、もひとつのむひ有りくま  
くもあよばしきてるまをばしきて配く、ぬあるるふ由文  
りあきの信もあ本るとは是又ぬしは茂林の事、の皇額  
兼役り便宜ありあよひくろばとさては法甚く照文と  
會さるるつゝありそをばしきてはさりとてはぬ自を筆  
まうし、このまじり地をの事、何の事ともなき、そはぬ照  
文の許申よ、ちよとせめてあ本るとか、一をうと、いふも  
深好む、つゝお又るよ、算盤あり、お島們、すお、

てこそそれと、あつゝ、ぬあ、と、あ本るとは、一、利益と  
あつゝ、さるる、里見より、三ヶ所、十二箇の地を、空の進の銀香炉  
あり、は、女、盤、を、見、越、し、の、や、ち、ぬ、と、地、勝、軍、地、を、影、西  
ら、再、興、して、本、住、職、する、の、能、化、院、の、本、寺、と、い、ひ、た、三、ヶ、所、は  
て、の、座、の、り、地、を、ち、り、其、補、と、云、家、と、は、信、仰、と、云、ふ、の、地  
を、し、く、く、せ、り、て、外、二、所、へ、寄、進、さ、ぬ、は、是、へ、も、又、寄、進、せ、り、て  
は、有、へ、く、に、況、や、里、見、の、賢、明、主、の、萬、佛、一、佛、同、利、益、と、い  
ふ、る、こ、ろ、の、有、靈、を、驗、よ、は、名、家、と、云、ふ、の、り、あ、ん、や、こ、と、つ、つ  
恰、ぬ、る、ぬ、と、云、ふ、と、ち、り、も、其、使、り、て、あ、つゝ、る、何、く、何  
ま、て、上、秘、人、算、用、面、と、ま、り、さ、る、人、を、り、宋、板、の、二、切、経、を、







きふれハそれ昏くまてまらなまのハ例の者文ありし  
ありしといふ者文とありし影西とてなるのそしとハ  
誰かゆふまに於再貞經宮のそれとをまらへまらゆり  
本一冬とまらそくハ追福のゆりまへくまらまらそらん  
かゝりゆりかゝりハそまら昏かして有るまらそらるる  
さいらは臺院のそまら細文ありしとまら其側の  
後ハ後臺のそまら何れまらそまらし但しは臺院  
のそまら下室は昏かしてゆり餘人のゆりまら著ゆり  
其側の洋西とまらつとまらまら有るまらまらそらるる  
孝道といふのそまらまらまらあくまらまらまらまら

きふ一句もなきハ何れその人ありしとまら有らん  
又ハ大教員ハ鏡塚猶其餘ハ詣りて法會や一  
林の石碑ハまらて余ハ順路これハ別ハまらひまらてハ  
ありしゆりまらまらしる層崖の家使ゆりまらまら又  
まらハ曰しことハ彼れハ大新行因縁の地訪りしとまら  
まらまらハまらまらまらハまらまらまら者文とまらあし  
まら訪りてまらハ是又何れまら人ハまらまらまら定まら  
らんハ或ハ後ハ又ゆりまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらありしとまらまらまらまらまらまらまら  
まら影西とまらまらまらまらまらまらまらまらまら







ぬちれと信乃と道帝とらアてまう諺言は凡作  
あぬといへと状をいへと又照文う焼香のところ  
神主供物のるやあれと石塔ハ細工の精妙と二の壇を  
ゆかといへ状をいへと画面ハ普通ある状をいへ  
ちれといへ文面ハなれはあれと定めしよりて  
そこの石塔のやうは有ちれと其六段ハ未得う言  
ある竹季其基の墓表よとの石大地飛よてそれう  
星額よ財囊を頂よかくはと後ハ照振とあり  
あらんさるゆるよそ傷くと退くと和解めてなるとい  
らんよて此雲黒よえよと就云なきの社に客們は  
ん

五魁の頑徒們も必り此を敬服して又血けり  
さきよよるよと有まよとんよとそこの  
それよまう合やちれとそれハ石塔は  
よて同くすまのわよちまう是又肝心のおちよ  
神定合よハりやくそあり有まよとそこのハ何そ  
意外なる係のぬとありぬといふよ星額ハ  
波石大地飛よと和解の落口いふんとゆりく  
ありたることよ本輯並研してんハ二  
似よちやのるよとんよとあよとよてハ大よ  
遠よといふよとちよと測るよと神巧ぬ思



をゆくもゆく感服さつ々々いおのれも推算の折ち  
くむと之類も暫くうその窺ふ黒闇をさへ入し  
明くおかしくさう耻をもちあはさるる酔狂め  
きしれとこれと一つの笑種お揖と評は彼石塔の飛  
ぶきりといひくる賢答は其真形をいふぬ深意は  
昏さるる其奇をさうかきさるるむとわといふも  
さうさるるさうさきとさう一白の奇跡みり入るは  
くおやろれともさうと墨作の奇石塔其形おれさう  
と遺憾ある人々とも彼目々さうこそ論は及たる何と  
ら意外奇ぬのさ後よあるふと有る奇をさうせ

さうせらるるれとさうさあさうさ石塔成りてハ佛作奇異  
あれとも成りてハ別ハ奇異な石塔只精妙まで凡作あれ  
奇工のぬを奇とさう一精妙ハ形いひく又文字のさう  
あれハ画畧ハ俗むらと答よあれもまゆえそれ又同一さ  
き法名彫る形あらんさうハ別ハ奇をさうさうて顯  
ハよそれと形して其精妙を物文は昏たへれてさうさ  
焼香場のそさうのりも必おる塔の法名さうの形状精妙  
うやくくさうさくあれもさうのさうさハ解けても  
さうよ又あらさうさうさ有るさうさかくれれと  
石塔はあよ畧餘のむいあれさうは文畧は結



城よりあつた此石塔は人お糸せらるるはつ眼より見て  
何やふ合ふおをぬてさてこそお除旧癖の字冷ゆ  
お来しおち其おはるまんと昏いそふとを二事の  
其おはるまを有るり猶又星額前輯より和解めて  
そを相計えんはいさおおれお解あつんとゆりみんよ  
本輯初巻走らする一言半句いひくはあつと縛り  
伏せぬ駭き慌てあひおしと叫ひつらびつのかかくと動  
きよせぬ師の醜態その外のものくら似十悪  
徒威重とつち未得それと告げ許へ朝さともつと  
廢寺よあつたをるあしめつらぬ方便さあつと前言

たりとぬ和解糸此頑徒們此やまき應教道理も説く  
かひなうんところをさうぬぬお解ハまことよ意外ぬ  
ぬ和解よくおひよくあつとあつハくおこれあつていと奈  
明やあつとくくくくくく又醜態しよくおんて  
此師糸お輯よ既よや、凡僧よハ有ちまきたるあれ  
本輯其調子具つまきそハ後條の意外其機えく  
あつてぬ和解のええおきゆえ一調子くつてこそよこと  
凡俗らしき醜態を昏まてつるも有へきり狂又その  
調子よておまふく一二句の解話のこととあつてはてし  
あつとくそのことよをさうつらつらくくくくくく



一言守りよ及をてぞとくまをれしうしあ人まら  
醜態師系の上のみあつと悪徒們々放逸を慙ふは  
かの執鳥の務をて突のめし蹴りふとあくまで  
まろくめ揃むのちやいのためと悪徒們々後條は眼  
を睜り歯を切りまろのけろ苦しむ悪醜態の眞罰表  
裏は一のええとせぬ人のためと有より醜態のし  
牽立てし動ろろハ石佛の下濤をわしく唇をくちや  
狂れ餘測りてくまぬ海女の工人にあつるあつとと  
そこすてはいそろ及せんまろ右のくみえろあめろ力の  
一盃又推量りてくろろまよしかく測りてて醜態をくふ

もとハ思ひてあらふくし狂お念めぬとくまや何んほま  
て醜態のるろろくま思をれてま釋とハ何とや龍頭  
蛇尾といふまやいし又ろのあつひあつて叫ひつとくろ  
筆の上ハくろくして波師徒們も凡僧と又せんとの  
狂言あつるわさてハとろろるやろ一盃小もまろろ地  
花言やぬて場あつハとろてとあ人ろかめろ空説好情  
よひまろけいそんハあめしかく憚入しるるぢれと  
かまろくよ此醜態ハ今少しちやし有とまやしちろ  
此たハまし根をあまやろけいし飄蕩軟十あろや  
草又一まろろのろろより一笑し



自注曰右ふれん力一盃ふそえろの力を石  
地花石塔婆の貫目の念ぬことありく

百三十四

大ハ遺骨を護るべし凡済を犯しゆくは  
ゆくへん至論正議とて棟北の二議とわかくを依の道言  
う決りまうし果敢の決のこあはに義あり情あり信乃毛  
評さる評やしいふもさうし又説き居りまも社今其余  
評さるめしつし評さるも皆そめく至當ありさる  
ハをし大士あるふ大士と名ましくあはるぬ、大うさ  
せんふまも上とえうふ似ふれんハ謹言の丁寧是し又

大なるふ名をさるるゆゆはさうさるをにしてそ其つふ  
のよきと後條義實称さるの結ひ有りこれの扱今と  
をさるとそハぬ、さうさるて尺骨しあふ代は市り  
属まきさる動きさるこれさる孝嗣們と又いひ  
あはるまは懐厚情はさる筆跡さるわらふ筆跡  
前の時のさるのひて棟北は傳まを托さる其さる丁寧  
結ひ丁寧字合のさる又送さるのぬハ義まもあはる  
恩賜ちぬハさる於能やそれハさるハ又ハ湯と  
さるぬまさるさるあはる野兵三個のさる是又さる  
さて別もさるまうく孝嗣們の厚死衆のさるを諱と托



さる厚の義感涙せらるるまてさるの如三下の大士們的  
高量評議をうしてありしうまはあはれあはれめ  
の修むたれと議さるる理言びさるる理言びとらあり  
さるさるの隅をまてさるまはあはれあはれとらあり  
と肩のつむふとのあはれあはれあはれあはれあはれあ  
ほしくは理議理びを感しおひてつるまはあはれあはれ  
ゆくこの互に天よあはれあはれあはれあはれあはれあ  
如三下の如く文例さるる感心さるるさるるさるるさ  
時後の光景そのさるるのさるるあはれあはれあはれあ  
のあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

時その人の金情とほくさうてあはれあはれあはれあはれあ  
如癖を又二つ二つ信乃毛びさるる大照文よまはれあはれあ  
つとてさるるさるると思ひさるる本をさるる遠たまはれあはれあ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ  
大士們よりさるるさるるあはれあはれあはれあはれあはれあ  
と混雜さるる改葬さるるあはれあはれあはれあはれあはれあ  
つとあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ  
先父先大父の遺骨をさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
のさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
とらさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる



いふゆゑ言無きことありてぬ瘧中のまじりぬ瘧の災  
まてもいふゆゑに病に疾しく○紀二六と夥兵三人は  
唇翰をとりて先づ西大城へ船路を注進せりといは  
ぬよりそまき精妙しく船路をたよは議しり船路の事  
を人教ひておとす一岡高の駈道場あり只岡高に  
駈りて有へきと道場と精細なり○遺骨の  
老臣貞行奴隸三百人といふことそ有るなり病に  
今一人副も有てよらんをれを他へまじりてぬありに  
領国のやうく又獲し本まじりてぬ二人を足  
へまじり紀二六と西夥兵をやくりて伴當中あり

此下は細あつのみまはあしあし四家元の回翰を唇え  
さしてろよきと結をぬきろよきとぬきりて文の代累  
おやろし○近命寺頭唇よきぬきりて香華院  
としてとらる建之の其ゆえんをいふことろす大山  
不動は日本を尊そおのれ道は先づ年月日黒不動は  
そとゆきりしる耳の老はあつていあれを又ゆきり  
むことろをろりてろよきとぬきりて大山寺のま  
まゆきりん将をろりてあつて其好古の記録をいふて  
附會不改なり○あつてろよきとぬきりて命を親に  
いる園との香華院を二三年よきありていふことろす



住職をく廟墓にいま移さるといふ寺にぬくまお  
かされしり此命をいふよおてあなれと穢はは大山寺  
をえんはるは社跡あつるよ必用寺をこころよ一都とて  
女命をかとしはやく波はもう後行かくこそ有つめ  
さうまも你こころ腹内扶園をうらまへ感心之遺骨  
安葬のおこみはさうまといふ一大陸房榮居の世を  
チヤと構へこころおかされしぬと深におかす一  
題字ハ大の本をあらうとも此住職開山として国主父  
祖内室の改葬の尊師なるもの實は一大国の国師と云  
へく左俗東條の城をこころんよう於一寺の寵用貴任也

法師の重慶はいふしりこころでなくはぬぬくおは深  
ぬ感心○遺骨入寺より安葬の葬兩侯世子參詣  
の儀礼其餘何れかひらくふとを著翁みらるの  
言ありぬ結城法會間もよく又抹香をうり於又大  
佛事凡作あんよはくをけりくをみてうらうらま  
るむらとぬ草かくのぬ清香教都いこころけあ  
寺にやれ社に殿威儀そのつらとよく退るをまは  
寺ぬくしり伏所の末主ハ遷すていこころんれよ  
制をいこころるそのまは只その籍のこころんや  
伏所のこころんるの園自注語ら○改葬のすて







ついでよ夏行病患おのまゝとておもひとて女も勤  
うしむるハ甚憾ぢぬもかくふくも狂命ありて犬士  
們、再會し里見より賞をいひつらしハ暴虎と云せり  
し甲斐ハ有りり此義史ハ仕健て入房さるこまきめ  
ぢぬも既ハ代官ありぬハニ老勇と重りあらんをも  
黄忠殿顔と又脚色もあるへく免しと彼者と此傳  
同くゆきさてハ多端ありてハこまきハ快復あり  
りぬしハあかく病者ふ事とてハ一ハ此史ハ田川以  
来老侠の花ハ十を嘆やせて有りし女塔ハ有種あり於  
ふやるところの義侠ハ翁塔同ぢぬハ有種さためて

入房して老副代官ハ亞きて負外の犬士の序まじり  
へきあらんやとてハ此史快復なくとも深くハ憾ぢなきも  
あぬり○犬士們的諸話有種の賜を恩賜を辭し  
受ふとてとてく條記をらん犬士們ハ見候ハ見参  
のちお家準備のみとて余おと求る準備めらんや  
そとの籍のこあると清白おをわるとてとてとてとて  
しり彼法令の礼服も有らんもこそとて又必あらん  
とてとてとてとて又かの吉凶混まらん○有種入房を  
辭さると義史の大病ハ壯圍のるをいへとてとて  
を至極之有種里えとてとてとてとてとてとてとてとて



みはるきくへくはいんや馬今ハせつふさるのめく  
ある如律言ハ夏冬の病喘も又つふとらそんう飯も  
せよせ不有提只犬士ハ具ハゆくのきとハくれとつと  
入房のええあつて何そ又ふハくれおあめとえ有  
らせふてのうめー○大饗食饗とさめ茶菓子  
まハ探賢とて送別まハ心申焦燥も家守質ハさるし  
のよて一刻片時と思令をゆるせよせさるのうきまを  
ゆるのすよハあれといつと食さるを其時ハ間断せ  
らぬとらあつさるふ今朝十住河ふハ船とてそとら  
穂北ハ袋里うきと糸と末うてふふ別盃ハ下晡まで

しつり子えぬ船ハ有種うらりのほとよりハかーとさ  
食ハ酒壺あれハこそとふハ友日のいとせまきハ朝  
より夕までいそぐはつん位ハ大照文ハ穂北ハ本  
もハ午時後ハ犬士ハ既ハ晝飯の飯二人ハ道まで  
とつてめ末ハまるとハゆへも十住ハ穂北ハ本  
長日の朝より昼までまでの遠きほどとハゆへと  
かハかくハ饗食饗ハさうくさうと冷飯の湯漬もさうと  
ゆへととハ大うかうけて犬士ハ照文ハ代日帯ハ服とカ  
へハあつんうかくふハ一時ハ戲言ハまことハさうハとせ  
のあつハ影兵伴者ハ伴者ハと酒飯もハとせ



よのそけさよし大武士のうしは難果あらんやおれは食  
籠あつては事平く大くそちさういふこと袂ささう  
てころうよ別るその二書言のその口誼人多ふおれ  
つとを大いひそくよさそふと格とくあく類あつてあ  
もりの主客のりやう我上はあつてつとめーかの焦燥の  
意よとさうささうつと二書言のそのは供あつては酒飯  
もゆー上さふの六船へおあーはるさうあつてあつて  
さひてゴテく席上へ照とあーつてさういふあらんや右  
等の指揮は有種重アさんとなふと離るさうの六船も  
ゆーを智今小六二名あふる人さんさう○北庄客

ゆー大士の又よさうとさうまてお座れは遠く送らん  
くつていひあぬと有格さうと意よと昨日のおさうと告さぬ  
稽あもさうとを格お莊客の普通廻あぬ義おささふ  
さいおさうさうさう寄縁あつて防んとあぬさうさ  
さうさう二格あつてさうとさう遠く送せんの義さうさ  
格さうさう○大士們重アは大人は大病中厭さうさう  
怪うて故意さうさうと別る本意さうさうとは今あ  
別離のさうさう一日ころのさうさうさうさう病中いさ  
く久くおさうさうの疲さうさうさうさうさうさうさ  
十日さう其家よ返るしてあつてさうは病床よさうさ



半語ハミシクシテあるも有まき、故、武士の飾  
らぬ、士にても、なありて、いたる、い、え、う、せ、る、こ、ろ、あ、れ、ハ  
義使の文、厚、一、と、い、へ、も、教、族、あ、る、大、病、人、と、り、み、じ、う、病  
床、へ、み、う、ま、う、て、益、も、な、き、い、回、に、上、ふ、と、い、え、ぬ、ま、あ、ら、  
や、それ、あ、ハ、こ、ろ、と、う、ハ、こ、ろ、と、う、あ、れ、を、餘、う、ま、さ、し、り、  
孝、嗣、們、の、死、と、再、三、再、の、り、よ、と、ハ、少、く、後、深、あ、る、ぬ、ら  
よ、と、それ、こ、ハ、お、ん、く、に、還、る、中、病、床、と、認、ひ、せ、し、智、め、し  
ま、う、ん、の、目、ま、て、な、く、も、念、し、て、る、ゆ、こ、念、し、て、る、ゆ、ま、  
別、ハ、目、く、し、と、是、又、例、の、者、文、く、ま、し、ま、ぬ、ハ、ま、ぬ、の  
ま、ハ、ま、し、り、今、日、の、女、子、難、の、事、と、定、め、ら、ぬ、と

こと、や、め、し、ぬ、と、い、ふ、と、念、ま、し、ぬ、の、や、ら、う、と、い、ふ、  
やく、な、き、小、理、屈、と、し、筆、費、し、て、答、て、し、つ、く、こ、其、筆  
つ、いて、よ、画、面、の、難、を、試、ま、り、て、み、ん、は、一、こ、ろ、よ、う、な、ま、り、  
は、一、次、と、た、ま、え、ら、う、一、重、う、う、十、念、を、う、く、の、よ、る、別、を  
席、か、ま、ら、う、條、は、よ、う、く、の、や、ぬ、あ、ら、と、大、士、其、余、の、列、を  
の、り、や、填、せ、お、と、う、何、お、と、う、何、り、上、人、を、請、む、う、て、怨、重、  
解、脱、と、い、伸、し、ま、り、ふ、ま、き、存、中、い、ぬ、と、か、つ、あ、ら、う、十、念、  
を、授、け、ぬ、れ、あ、る、ま、し、も、ろ、人、を、存、を、改、め、ら、う、て、わ、く、め、  
も、有、ら、う、或、ハ、い、ま、こ、を、お、あ、さ、ま、ま、し、え、を、元、十、念、を  
を、い、う、く、ら、う、我、の、病、厄、解、除、の、た、め、ハ、も、と、ら、ぬ、ふ、ら、う







めうーとさみあていんるいんとさうふいぢぬと費をハ  
美の家ーまっあつるうとともさう難まらうとて前  
こいさうさうくと退るさうひらうとさうさうとつと  
われらるるさきぬ大筆を感称せらる人あふくにおも  
とぬと二三の同志はぬハ勿論おのれと同感あふー

百三十二回

大士們的船先つ足きて汝石地より下りくらほとよ伴者們  
の船も後まそそさるるくふ所までハおやうらうらにおくれ  
又いとこ恰なつふぬぬ人々ぬのるまでぬことと趣  
をつけて尺首ささるハ自互苦のさき筆うぢぬと

おふハいつとふく感服之○大士恩令の人馬と辯とを  
ハ大々論して憤詰くそ理言ハわとるん衆切の穂地へ  
行脚お扮のそハさき今日ハ又さきふとこととよはくして  
おやうらうら○大士們またまふぬ所従の人馬こハえ  
さうらふとさきハたまふの時服をまハいふさや大士們  
よハ家あつと旅さう旅の人とハ但一そぬく用さの金と  
くのでめらみてさおぬハ今日見参ぬれ服ハぬの下有  
つさ苦ぢぬとも終目つぬの時お家ハ恩賜ありとさお  
あつとさやそと紋付とさおんさし記三層ハ既ハ大山さ  
紋付とさやそとおやうらうらハ彼時ハ旅ぬのるハぬれと既







いとのと公の事と事有りと結ぬ代は命の伴者例  
の又これのうらまを結ぶ細之○仁義八行字順の改系  
両侯見参も同様に此改系系ぬ之犬士中おのつら  
人々も此改系もあつていさまためおのつら其  
此改系も有りと此改系もあつていさまため  
の多きを有るまはれと此改系もあつていさまため  
両侯見参も同様に此改系系ぬ之犬士の座  
とあつていさまため又おのつらも定まる座  
あつていさまため座定むべきもあつていさまため  
とて行列見参も改系をくは有るいさまためで此八行

字順えらうていさまため此改系もあつていさまため  
ぬ之親屬ハ振合の使も有り御導をくめて一番  
しる字順もあつていさまため其改系もあつていさまため  
を二隊とて間をあつていさまため又、大と二三年間引  
下りてと有るぬハ例のぬまをけし深きもあつていさまため  
ハ改系もあつていさまため後隊もあつていさまため細代轎子寺侍  
くまも美もあつていさまため具もあつていさまため行脚お折と雲壊反封  
ハ大ら本もあつていさまためハ玉つらもあつていさまため功成り行列もあつていさまため  
国主の香華院也先堂のあつていさまためハ大  
英後もあつていさまため春年二十前後馬上の



うふ移りんてぬいりあつるよいさぬーろろんぬ上よえ  
るぬ想像せぬわつ見参そそぢぬいそて先滝田より  
ちるるもらるわくそそ有るまぢぬ二務富山よ人主法  
師うそぢ言ひて行しよりいぬあまゝ年あまゝかこ  
けいそ今そそよからハ美士ことよ又外孫と擧げそ  
へき国と人あをかくそそ入家よひてえそ老侯の  
鈴弄いよ有るん會笑子うぬせらよ十萬のほねこ  
わりて十萬の深敷あり七人の功業をかそあけて言  
ふくそぢお見参のともやういそよ○西茶片茶  
のれめつそまぢりろきるもあふそそろん被京の

故実よそそそ好む人ハ知あるよあ入まぢぬ  
あぬいそろよハこまそそ今そぬまそそあて  
知ることよあつそおほぬことぬよかそいぬ此層よ  
よりそそあつの益おほりもハかの勸懲めう人よ又  
博物のいぬとたそそ移ることこらへまぢぬ○  
近余寺ハ香華堂ハ士汲の功業あつそそ西茶の  
格も有るまぢぬいそ業もいそ入る代にぬぬぬ  
と片茶のれとえぬぬふぬよそ感涙をぢぬぬ  
ろらんことらうしたぢらうお茶片茶とせらしそ義実  
の身のはとよハちと潜上のやうぢぬとれせしそいそ











